

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 安南訳語の研究(二)  |
| Sub Title        | A bibliographical and linguistic study on the "An-nan-yi-yu" (安南訳語)   |
| Author           | 陳, 荊和(Chen, Ching-Ho)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1967  |
| Jtitle           | 史学 (The historical science). Vol.39, No.4 (1967. 3) ,p.37(481)- 53(497)   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19670300-0037">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19670300-0037</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 安南訳語の研究 (二)

陳 荊 和

## 第一章 安南訳語の源流及び伝本に就て

中国歴史に於て明初は中国の統一が再び実現され、蒙古人の手から漢族が久振りに政治的ヘゲモニーを奪返した年代であるばかりでなく、対外的に云つても海外諸国との通交が頻繁に行われた時代であつた。洪武朝に於ける南海諸国との外交上の来往は云うに及ばず、永楽から宣徳にかけての鄭和等の七度に亘る南海遠征によつて、中国人の南海に関する知識は急激に躍進し、その直接・間接の結果として、馬歡の瀛涯勝覽、費信の星槎勝覽、鞏珍の西洋番国志、黄省曾の西洋朝貢典録、張燮の東西洋考等一連の書の出現となつたが、<sup>(1)</sup>外国との通交が盛となり、外国使臣の来朝が繁くなると、明朝の外交文書又は外国使臣の接待を司る機構に於ても外国語の習得や外国文書解読の必要を生じ、四夷館の如き、そのための専司も置かれ、又諸外国語学習の目的を以て云わゆる華夷訳語の編纂も行われるに至つたのである。

華夷訳語は明朝官吏の外国語学習書として明初から次第に編修されたが、早くから民間にも流伝したらしく、隆慶庚午年(一五七〇)朱陸樺撰万卷堂家藏芸文目雑誌(北京図書館書号 No. 1327, 鈔本)には訳語一卷(岷峨山人)、華夷訳語一卷(劉三吾)の名が見え、晁璠撰晁氏宝文堂分類書目子雜部(北京図書館善本書号 No. 1328)にも華夷訳語の名が見え、無名氏内閣書目(同上、No. 1329, 明鈔本)にも華夷訳語一冊と見えている。又明錢謙益蔵する所の牧齋書目地誌類

(同上、No. 1323, 明鈔本)には華夷訳語・増定華夷訳語・西番館訳語等の書目が見え、清黄虞稷撰する所の千頃堂書目(同上、No. 1283, 鈔本)にも華裔訳語九卷・増訂華裔訳語二卷の名が見えて居り、何れも各種の訳語が明初から引続いて編纂せられたことを物語るものであらう。

一方、歐洲方面には一七八三年に仏蘭西の神甫 Rev. Jean Joseph Marie Amiot によつて華夷訳語が初めて招來されたが、十九世紀の初頭から内外の東洋学研究者の注意を受け、爾來華夷訳語に関する研究が各国の学報に屢々見受けられ、その流伝の情況及び各種訳語の内容も次第に闡明されるようになった。

今過去の研究情況を顧りみるに、華夷訳語に包含される各種の訳語に就て考釈を加えた学者は J. Klapproth<sup>(2)</sup> を初めとして W. Grube<sup>(3)</sup>、E. D. Edwards<sup>(4)</sup>、C. O. Blagden<sup>(5)</sup>、田坂興道<sup>(6)</sup>、小倉進平<sup>(7)</sup>、伊波普猷<sup>(8)</sup>、秋山謙蔵<sup>(9)</sup>、山本達郎<sup>(10)</sup>、E. Gaspar-done<sup>(11)</sup> の諸氏及び筆者を算え、又本書の書誌学的研究には Denison Ross<sup>(12)</sup>、P. Pelliot<sup>(13)</sup>、H. Maspéro<sup>(14)</sup>、L. Arousseau<sup>(15)</sup>、石田幹之助<sup>(16)</sup>、神田喜一郎<sup>(17)</sup>、浅井恵倫<sup>(18)</sup>、陳育崧<sup>(19)</sup>、許雲樵<sup>(20)</sup> の諸氏が種々の観点から議論を發表して居られる(補註参照)。就中、石田幹之助教授の論考は華夷訳語諸種の伝本を広く漁り、歐洲諸学者の学説をも充分に検討した上で、合理的且つ系統的な分類方法を提出して、本書の研究に對して絶大な寄与をせられた。本文の主目的は華夷訳語の一種である安南訳語の考釈並びに同訳語に見られる中世越語の声母の研究にあるので、従來の諸先学の学説を詳述することは避け、唯吾人の研究対象たる安南訳語の伝本、出處及び編修年代の諸問題に就て論考を加えたいと思う。

先ず、最初の華夷訳語が編修された動機及びその経過や趣旨に就ては、明太祖実録(卷一四一)洪武十五年(一三八二)正月丙戌条に次の如く謳われている。

命翰林院侍講火源潔等編類華夷訳語、上以前元素無文字発号施令、但借高昌之書制為蒙古字以通天下之言、至是乃命火源潔与編修馬沙亦黑等以華言訳其語、凡天文・地理・人事・物類・服食・器用靡不具載、復取元秘史参考紐切其

字以諧其声音、

次で、洪武廿二年（一三八九）華夷訳語の編修が完結したので、明太祖は更に詔を下して鋟印刊行を命じている。此の時刊行された華夷訳語は僅かに蒙古訳語の一種のみであるが、その篇幅内容は可成り充実したものらしい。清黄虞稷の千頃堂書目によると、火原潔・馬沙亦黒撰する所の華裔訳語は九卷を算えるので、訳語と云うよりも字書に近かつたのかも知れない。爾来、明朝と国交を維持した諸国の言語が次々と編修され、嘉靖年間（一五二二—一五六六）には華夷訳語なる名称で包括される訳語の数は十余種の多きに達した。

これら後出の華夷訳語は最初の蒙古訳語に比べると内容的に簡化されているが、その基本的な構造は要するに漢語と外国語の対照語彙とも云うべく、始終「以華言訳其語」を原則としている。其の編修の目的も中国の官吏が国外に使用した場合、又は明朝の中央機構で外賓を接待饗応する場合に生ずる言語上の困難を減少することに眼目を置いたものであるが、諸種の訳語の編成年代は齊しからず、その内容・体裁も全然同じと云うわけではない。かくして華夷訳語と云う大部の編纂物の中で、来源及び形成を異にする幾種かの訳語が認められるのである。

石田教授の分類に依ると、華夷訳語は甲・乙・丙の三類に分けられる。甲類は太祖洪武年間に刊行された蒙古訳語を指し、乙類は永楽五年（一四〇七）四夷館開設以後、所属館員外国語学習の便宜上成祖の勅を奉じて編修され、清朝の順治元年（一六四四）四夷館が四訳館と改称せられた後も屢々改訂を加えられて六種乃至八種の訳語を具有するに至つたものを指し、丙類は安南訳語所属の伝本で、朝鮮・琉球・日本・安南・占城・暹羅・鞮鞞・畏兀兒・西番・回回・滿刺加・女真、百夷の十三種の訳語を包含している。其の体裁は十三世紀末の陳剛中交州藁に見える漢越語彙の記載方法と同じく、各個の訳語に対して漢字を以て外国音を表記して居り、門別及び排列も大体同じである。唯乙類に見られる如き「来文」・「雑字」の区別はなく、今迄に刊行本があつたことも聞かない。今その若干例を挙げるならば、安南訳語は十七門に分

れ、七一六語を有する、一方占城訳語は十七門(六〇一語)、満刺加訳語は十七門(四八二語)、暹羅訳語は十七門(五一五語)、百夷訳語は十九門(六七五語)、朝鮮訳語も十九門に分けられている。この称に門別が大体同じであるばかりでなく、各訳語内部の語彙も多くの単語を同じくするので、これらの訳語が同一の機構により、同一の規劃の下に個別的に編修されたことは先ず推測され得る所である。

丙類華夷訳語の伝本の中で安南訳語を存するものは現今僅かに次の七本を数える。

(1) 倫敦本：英京倫敦 School of Oriental and African Studies (University of London) 所蔵の明鈔本で、十種の訳語を存する。

(2) 河内本：越南河内仏蘭西遠東学院所蔵本で、楊守敬の旧蔵書であり、十三種の訳語を存する。

(3) 静嘉堂本：東京静嘉堂文庫所蔵本で、十一種の訳語を存する。

(4) 阿波国本：徳島市阿波国文庫所蔵本で、十三種の訳語を存する。

(5) 稲葉本：稲葉君山氏旧蔵本の鈔本で、十一種の訳語を存する。内藤虎次郎氏及び京都大学は夫々その副本を所有して居り、本文が利用したのは内藤氏の副本であるから、本文では内藤本と称する。

(6) 近藤本：近藤正斎全集(巻一)安南紀略彙収録する所のもので、安南訳語一種を存するのみであるが、正斎書籍考に依ると、その依据した伝本は四訳館訳語で、十三種の訳語を存したとなしている。

(7) 玄覽堂本：玄覽堂叢書統集第一百冊所載、明呉人慎懋賞輯する所の「安南国訳語」。

丙類伝本に於ける同一訳語間の關係に就ては、曾つて倫敦で親しく倫敦本(A)と阿波国本(B)・静嘉堂本(C)兩本を対照・検討された浅井恵倫教授は満刺加訳語の内容がA本とB・C兩本の間では可成りの差異が存し、A本の安南・回回兩訳語の巻首に「部門総目次」が附してあるが、B・C兩本にはこの項目を欠くことの外は別に取立てて云云する程

の相異がないことを認められた。<sup>(21)</sup> 小倉進平氏もその著「朝鮮館訳語々釋」の中で、倫敦本・稲葉本・阿波国本・水戸彰孝館本の朝鮮訳語を校合せられた結果、其の間に書き写しの際の誤りに基く若干の異文が認められるが、大体同一種の伝本から出でたものとなしている。<sup>(22)</sup> 更に河内本と其他諸本の関係に就ては同本が楊守敬留日中に入手したことからして、同本が日本に於ける諸本と同一の伝本に属することが初めから想像されるが、筆者が実際に安南訳語に就て校合した結果、河内本・内藤本（即ち稲葉本）・阿波国本の間では門別・排列・語数が全く同じであるばかりでなく、誤字・欠文に至るまでも殆ど同一であることが判明した。其他の倫敦本・静嘉堂本・近藤本にしても上掲の三本とは多少の異同はあるが、何れも同一原本に依つたものと判断して差支えない。以上の六本に比べると玄覽堂本は独自の性格を具有して居り、その詳細はあとで述べるが、それでも他の六本と体裁・原本を同じくする点では変らない。上述の考察を綜合すると丙類に属する各訳語の間で満刺加訳語の外、其他の訳語は均しく同一の原本から出でたものと認められ、たゞ筆写の際の疎略或は流伝の際の特殊事情によつて略異同を呈するに過ぎないと考えられる。

丙類華夷訳語の編者に就ては、H. Maspéro は洪武十五年に命を奉じて第一部の華夷訳語（即ち蒙古訳語）<sup>(23)</sup> を修した火原潔が三十年後再び命を受けて華夷訳語の編修を担当する可能性があつたと見て居り、<sup>(24)</sup> L. Arousseau は率直に河内本は明人茅伯符（瑞徵）の編修に係わると認めている。稍後れて、P. Pelliot は巴里国立図書館所蔵の彙刻書目補逸の内では「十国訳語」なる書名を検出され、その下に朝鮮・西番・暹羅・琉球・日本・韃靼・百夷等七種訳語の編者の名前を発見せられた。<sup>(25)</sup> 訳語の名称より見れば、この「十国訳語」が丙類十三種の華夷訳語に属することは明らかであるが、遺憾ながらこのリストの中には安南訳語編者の名前は見当らず、又その編成年代に就て何らかの暗示をも含んでいない。Maspéro の説は年代の点から云つて無理であり、純粹に臆測の域を出でない。又 Arousseau の説にしても、かゝる書物の性格から云つて十三種の訳語が同一人によつて編修されたとは考えられない。それは各種の訳語に依じてその種の外国語に

通じた人物が個別的にその責に任じたのにちがいない。さすれば、茅伯符が丙類十三種訳語を鈔出したことはあつても、これを編纂したことは考えられない。かく見ると丙類訳語原本の編者を探求めることは少くとも新史料が発見されない限り不可能であることがわかるのである。

併し問題の範囲を広げて、転じて各訳語の出処を求めようとするならば若干の糸口が得られないわけでもない。按ずるに丙類十三種訳語は恐らくは同時に編修されたのではなく、実際の需求に応じて可成り長い期間に継続して編修されたものであろう。若しかゝる推測にして誤りがなければ、丙類所属の訳語の名称から推してその若干種の訳語は四夷館から出たものと推定出来るわけである。四夷館は永樂五年（一四〇七）初めて南京東安石門外に設けられ、翰林院に隸属し、訳字生及び通事を置いて、「通訳語言文字」の責に当らしめ、鞞鞞・女真・西番・西天・回回・百夷・高昌・緬甸の八館に分けられていた。正徳六年（一五一一）には八百館が増設され、万曆七年（一五七八）には暹羅館が増設されているので、丙類の中で以上の国名を冠する訳語は四夷館から出、その編修の年代も各館開設の後であると見られるが、併し丙類の中には滿刺加・畏兀兒・占城・安南・日本・琉球・朝鮮の如く四夷館に館別のない国々の訳語も含まれて居り、これらの訳語は当然四夷館から出たものと推定することは出来ない。Maspero は明会典（卷一〇九）を引いて、洪武・永樂の間に設置された会通館には各国通事が置かれ、同時に朝鮮・日本・琉球・安南・柬埔寨・暹羅・占城・爪哇・蘇門答刺・滿刺加・鞞鞞・波斯・女真・畏兀兒・西番・河西・緬甸・百夷の十八処の専司が置かれたことを指摘し、且つこのリストには丙類十三種訳語の国名全部を包含している事実<sup>(26)</sup>に注目して、安南訳語を含む華夷訳語は会通館にて編修されたものならんと推論した。石田・浅井両氏も殆ど同じ見解<sup>(27)</sup>を持して、均しく丙類訳語が四夷館に属することは不可能であると見て居り、特に浅井氏は進んで、丙類十三種訳語の原本は弘治五年（一四九二）に開設された提督会同館で編成されたものと推定して居られる。浅井氏のかゝる推論は茅伯符が華夷訳語を輯したと云う説と相補うようである。茅伯符の経歴を見る

に、茅氏は曾つて兵部職方主事・南京光祿寺卿・鴻臚寺卿の諸職を歴任している。茅氏撰する所の皇明象胥録に見える呉光義の序文に曰く、

年友茅伯符往即職方、最留意辺防扼塞、茲以勲卿領大鴻臚、局閒務簡、乃出其向所蒐次四夷考、更加訂定、閒手以示余曰、此臚官所宜及也、

而して明朝の制度によると、会同館は兵部の管轄であり、鴻臚寺卿は参朝・饗宴・蕃客朝覲等の外交儀礼並びに接待を掌る役所の長官であるから、茅氏が外国の貢使や来人と接触する機会は少くなく、その職権を利用して会同館の各種訳語を鈔出する可能性は充分あつたわけである。楊守敬もその日本訪書志(卷六)にてその所蔵する華夷訳語(即ち河内本)が茅氏の未だに刊行せざる「四夷考」の一部份と見、「此書当必明四夷館中底本、為茅氏所鈔出者」と述べている。楊守敬が華夷訳語の来源を四夷館の底本と見たのは妥当ではないが、要するに茅伯符所輯の華夷訳語があつたとすれば、それは何も茅氏原編ではなく、彼が職権を利用して会同館からうつし出したものであると見ねばならぬ。

併し、安南・朝鮮・琉球三国の朝貢事務は四夷館に属せず、實際は鴻臚寺の管轄であつたことは Amiot 神甫も注意した所<sup>(28)</sup>で、許雲樵氏も日本・朝鮮・安南の三国は中国との関係が特に深く、いづれも漢文を習得し、上表文にも訳字を用いる必要がないので、四夷館にこれらの三館を設けず、唯会同館は来朝の使臣との直接折渉の責に任ずるので、簡略な訳語を以て貢使との応接に使用する必要があつたと述べている。<sup>(29)</sup>又、Norman Wild 氏は呂維祺修、曹溶補の四訳館則(一九二八年、京都大学、羽田亨編)に基いて、明四夷館の組織や職務に就いて紹介した際に、四夷館と会同館の職務の相異にもふれ、外国からの公式の文書は四夷館にて翻訳されるが、実際の現実的な問題の討論は会同館の通事(oral interpreters)に任せられたと云い、又日本語・朝鮮語及び安南語の語彙を含む華夷訳語は四夷館とは何の関係もない、何となればこれらの三国は国書又は外交文書に漢文を使用するからであると述べている。<sup>(30)</sup> Pelliot はその晩年の雄篇“Le Hoja et le

Sayyid Housain de l'Histoire des Ming”の附録として四夷館や会同館の起源や沿革をも考証したが、会同館に就てはその名称は金代からあり、元代の会同館は一面では外国使臣の宿舎 (hôtellerie) であり、一面では外国使臣の来朝に關する事務を掌る役所でもあつたと述べ、又明の会同館はその制度を受継ぎ、ある程度まで双方の性格を兼ねるが、一三九七年 (洪武三十年) 侍儀寺が改称されて鴻臚寺となり、朝貢事務、特に謁見、文書の翻訳を掌るようになると、会同館は貢使に対して宿舎を提供する外、実務的な問題を処理することとなり、實際的な交渉は会同館に属する通事 (interpretes oraux) がこれに当る、だから会同館の通事は四夷館の官員よりも外国語の知識を必要とすると述べられた。<sup>(31)</sup> 又華夷訳語に關する研究にては、Pelliot は明らかに四夷館系 (即ち石田氏の乙類) と会同館系 (石田氏の丙類十三種) 両系統の華夷訳語の存在を認め、「外国文書の翻訳者のための明四夷館の語彙と、通事のために作られた会同館の語彙との間の差別は前者が外国語をその原来の外国文字で記し、漢字の音註を添えるのに対して、後者は唯漢字の音註をあてて、外国文字を記さないことである」と強調した。<sup>(32)</sup> 以上の許氏、Wild 氏及び Pelliot 氏の見解は何れも合理的な推論であり、安南訳語編修の方法に就て、筆者が推断した点とも合致する。要するに、丙類訳語の内、少くとも安南・日本・朝鮮の三国訳語が会同館から出たと云う事は殆ど疑う余地がないと思われる。

編者・出処の問題は当然編成年代の問題と密切に繋つてゐる。併し遺憾ながらこの問題に就ても未だに明確な結論を出すことが出来ないのが現状である。上述せる如く、實際的に云つて丙類所屬の訳語は個別的に編修されたいが、従来その前後關係を明らかにする材料もないので、当然各種訳語の明確な編成年代を知ることが出来ない。唯、目下この方面で唯一の確実な手がかりは倫敦本の日本・滿刺加両訳語の巻末に見える次の如き簡単な跋文である。

(日本訳語) 嘉靖二十八年十一月望・通事序班胡澆・褚効良・楊宗仲校正。

(滿刺加訳語) 嘉靖二十八年 日、通事楊林校正。

嘉靖二十八年は西曆一五四九年に当り、この年に校正を経たと云うからには、当然この年が日本・滿刺加両訳語、引いては丙類訳語の編成年代の下限であると見ていゝわけである。

次に Maspéro は馬來語の訳語が滿刺加の名称を冠して居り、一方滿刺加王国と明の国交は永樂元年（一四〇三）に始り、正徳六年（一五一一）には同国は滅亡していることにより、滿刺加訳語の編修年代を十五世紀末年と見、晚くとも十六世紀初年を出ないと推論した。<sup>(33)</sup> E. D. Edwards 及び C. O. Biagden も略同様の見解を持っているが、一五一一一年が果して編修年代の下限であるかと云う点に就ては尚疑問を残している。<sup>(34)</sup> 一方、Arousseau は河内本の所謂「朱之蕃序文」が茅伯符を「年友」と呼び、又朱之蕃進士及第の年代が万曆二十三年三月（即ち一五九五年五月）であることに基いて、茅伯符編輯する所の華夷訳語の年代は十六世紀末年或は十七世紀初年であると推定した。<sup>(35)</sup> 按ずるに茅伯符（瑞徵）の皇明象胥録自序は崇禎己巳年（一六二九）の日附であり、同書の跋文によれば、茅伯符は浙江歸安人で、万曆二十九年（一六〇一）の進士及第であるので、若し河内本が茅氏の輯する所のものであるならば、その年代は十七世紀初葉でなければならぬ。更に伊波普猷氏は丙類華夷訳語の一種である琉球訳語と朝鮮の成希顔が弘治十四年（一五〇一）に撰した「語音翻訳」に見える琉球語彙とを比較した結果、前者の語彙が後者に比べて約百年も古いことを認め、一方明初に於ける琉球と中国間の頻繁な来往の状況に鑑みて、琉球訳語の編成年代は洪武・永樂の間であろうと推論している。<sup>(36)</sup> これらの諸説は均しく若干の史実及びその他の根据にもとづいてはいるが、併し事実上依然として臆測の域を出でない。例えば滿刺加訳語の場合、馬來語訳語が滿刺加訳語と称せられる所以は僅にその編成年代の上限が、一四〇三年であることを暗示するに過ぎないし、又河内本及び稻葉本に見える朱之蕃序文にしても、事實は茅伯符の皇明象胥録の呉光義序を採つたものであることが石田幹之助教授によつて指摘されている。<sup>(37)</sup> この事は吾人をして河内本の來歴に就て甚大な疑問を抱かしめるもので、果して十七世紀初葉に茅伯符が丙類の華夷訳語を輯した事實があつたかどうか疑問視されざるを得ない。

今問題を安南訳語に限定して考察すると、現存の安南訳語七種の伝本の内、輯者の姓名及び年代がはつきりしているのは玄覽堂本だけである。筆者はこの伝本を書誌学的に検討することによつて安南訳語編修の年代を或る程度迄しぼることが出来る<sup>(38)</sup>と信じる。

周知の如く、玄覽堂叢書は編者鄭振鐸の号玄覽居士に因んで名付けられ、初集は民国三十三年(一九四四)、続集は民国三十六年(一九四七)、第三集は民国四十四年(一九五五)に夫々出版され、主として明代の史籍を収録している。これら三集の内、続集には慎懋賞輯する所の四夷広記が収められているが、その一部である海国広記は安南・占城・暹羅等に関する中国史料及び史籍の抜萃が集められ、安南の部(不分卷)は更に疆里・安南山川・安南国統・安南制度・安南風俗・安南古蹟、安南物産・古蹟・物産・福建往安南国針路・安南国向暹羅針路・安南貢物・給賜安南国・安南芸文の諸項に分けられ、最後に安南国訳語が見えている。

慎氏の四夷広記は従来鈔本で伝つたらしく、黄虞稷の千頃堂書目(巻八、輿地類下)にはその四夷広記九冊の名が見えている。これによつて四夷広記、引いては安南訳語が確かに慎氏の所輯であることが了解される。次に輯者の原籍に就ては同叢書に「明呉人」と見えるのみであるが、張鈞衡の適園藏書志(巻八、子部三、雜家類)にはその輯する所の慎子内外篇明刻本を紹介し、その出身を明湖人、つまり明代湖州(呉興)の人となす。又慎氏の人物に就ては、同志は

懋賞号雲台、淵博嗜古、読書颺文陽中、広采百家、為之彙正、

と述べている。慎懋賞の慎子(戦国時代の思想家慎到)研究に就ては本論文と関係がないからこれに触れる事は避けるが、慎懋賞本の慎子は民国九年(一九二〇)「慎子内外篇附逸文校勘記」として四部叢刊子部に収められ、孫毓修の跋文が附せられている。又民国二十年(一九三一)中国学会によつて刊行された「慎子三種」には万曆朝の名人たる王錫爵や湯聘尹の序文の外に慎懋賞の自序も収められている。王序には

門人慎宇勲以是編見正、意甚玩之、試為条次、定為内外篇、蓋悲到之不過而幸其言猶存也、

と見え、文末は「万曆己卯（七年、一五七九）春三月、賜進士及第礼部右侍郎兼侍読太倉荆石王錫爵序」となっている。<sup>(39)</sup>  
又慎氏自序の年代は「万曆戊寅（六年、一五七八）十月既望、吳興雲台慎懋賞」となっている。これによつて慎懋賞は王錫爵の門弟であり、万曆初年、即ち一五七〇年代に活躍した人物であることがわかる。

今慎懋賞所輯の安南国訳語（即ち玄覽堂本）を他の六本と対照すると、直ちに次の如き諸特点が見出される。

(1) 訳語の体裁・門別及び語数では玄本は他の六本と同じであるが、併し少からざる個処で語彙の順序を異にしたり、又は他本で単一の語が玄本では二語連結して出現する場合が可成りある。例えば人事門で他本では「生」と「死」の両語が玄本では両字を連結して「生死」とし、音註も「僧」と「則」を連結して「僧則」となしている。

(2) 一般的に云つて、玄本では音註に充てた漢字が他の六本と異なる個処が可成りある。これらの異なる音註の採用によつて、

(a) 音註の音とそれによつて表明される越語音の距離が短縮している場合が多い、換言すれば、他の六本に比べてより精確な越語音が指示されている。

(b) 他本の越読音に対して越俗音を表明するか、或は他本の俗音に対して越読音を附加する。

(c) 他の六本に見られる音註の錯誤（或はあてちがい）又は不明瞭を是正する場合がある。

(3) 他の六本では訳語が名詞と修飾語を含む場合これに充てられる音註の語順は越南語の文法を無視して一律に漢文式に（即ち修飾語、名詞の順に）あてられているが、玄本では可成りの個処で越南語法に従つて名詞、修飾語の順におかれらる。例えば No. 27 の「青雲」に対して、他の六本は音註を「蒼梅」（xanh mây）とあつてゐるが、玄本では「梅蒼」（mây xanh）と修正されている。

(4) 玄本に見られる音註の中には訳語の越読音と俗語音双方を挙げたと解せられるもの〔例 No. 247, 馬—麻兀—*ma* (sv) *ngiua* (v)] や陪数詞を附加したものの〔例 No. 242 蘿葡—谷六布—*cú la bặc*] が認められる。

勿論玄覽堂本と云えども、音註採用の不統一や誤写や解釈の出来ない音註が存するが、上述の諸点から推考すると、この伝本の安南訳語は他の六本の年代よりも晩出のもので、明らかに校訂を経たものであると見ねばならぬ。その校訂が上述の満刺加・日本両訳語の如く嘉靖二十八年(一五四九) 会同館の通事によつてなされたのか、或は慎懋賞がその博學振りを發輝して筆を加えたのか遽に断定出来ないが、要するに丙類華夷訳語の内、安南訳語は原本と校訂本の兩種の伝本が存したことは疑を容れない。勿論書誌学の方面からみて、安南訳語原本の精確な編修年代は依然として明らかでなく、今の所これを推定する材料はない。然し明代の中越関係を見ると、永樂・宣徳間の所謂明属時代(一四一四—一四二七) 安南は中国領域の一部であり、且つ明朝の安南に対する高圧的な同化政策の施行から云つてもかゝる訳語が編修されることは考えられず、実際的には黎太祖が明朝の冊封を受けた宣徳六和(一四三一) 以後に於て始めて有得ることである。殊に浅井惠倫教授が主張するように、丙類訳語の原本が弘治五年(一四九二) に開設された提督会同館で編纂されたならば、安南訳語の編修年代も十五世紀末年乃至十六世紀初年と見るべく、更に玄覽堂叢書所載の慎懋賞輯安南国訳語によつてその校訂本は一五七〇年代に既に存在したのであるから、これらの諸点を考え合せて、安南訳語は十六世紀前半の越南語に関する確実な研究材料であると見做すことが出来る。Gaspardone 氏は日本訳語が嘉靖二十八年(一五四九) に校訂を経たことに鑑み、十六世紀中葉と云う年代は早からず晩からざる年代観であつて、雖え校訂でなくても、少くとも安南訳語成立の年代と見ることが出来、又この時期に校訂を経たものとしても、Alexandre de Rhodes 神甫の越羅辞典(羅馬、一六四九年出版)の年代より確実に百年早いとなしている<sup>(40)</sup>。かゝる見解は大體本文の年代観と一致するわけである。

次に従来の安南訳語に関する研究を見るに、其の数は至つて少い。菅見によれば最初にこの種の訳語に注意した学者は

明末の儒臣陳仁錫（一五七九〜一六三〇）である。陳氏は崇禎三年から五年にかけて（一六三〇〜一六三二）上梓された潜確居類書（卷十三、区字部八、四夷二、安南条）にて、安南の習俗・民情に就いて略述したのち、特に安南訳語を引いて、「其訳語呼天為雷、地為得、日為靄、月為燙」と記して居る。越南黎朝末期の文人学者であつた黎貴惇（*Le Qui-Dôn*, 1726-1784）はその著芸台類語（卷六、音字六）にて同じく同条を引き、且つ、「其差如此、蓋国音今無正字、只借北字微加偏傍・順口称呼、不入平上去入四韻、故彼方不能举其声、説録易差」と述べている。これは要するに越南の俗字たる字喃は充分に条件の備つた文字ではなく、又声調を表示することも出来ないもので、中国で越南語音を表記する場合、どうしても安南訳語に見られる如く頗る趣の異つたものとなると云う意味のことを述べたのである。次に徳川時代化政期の学者であつた近藤正斎（守重）（一七七一〜一八二九）はその著安南紀略藁（卷二）の中で安南訳語全部の語彙を収録し、更に音註の傍に片仮名を以て読音を表明している。正斎のかゝる試みは大體官話音に依拠して、当時の日本人に越語の一端を紹介せんとしたのであるが、仮名で表はされた音と官話音の間には既に開きがあり、更に全集本印刷の際校正の不十分により、けつきよく予期の効果を挙げる所か、却つて音註と越語音間の距離を拡げた感がある。正斎の後、安南訳語は殆ど学者の注意を引くに至らず、一九一二年になつて *Henri Maspéro* はその名著「越南語の歴史的声母研究」の序文にて近藤正斎全集（卷一）に収録された安南訳語を紹介し、この訳語・字喃の声符及び *Alexandre de Rhodes* 神甫の越羅辞典が越南語音韻変化の研究にとつて貴重な材料であるとし、その論考の中で屢々引用された。Maspéro の研究が発表されて四十一年後、一九五三年（民国四十二年）に期せずして *F. Gaspardone* 氏の *Le Lexique annamite des Ming* (*Journal Asiatique*, année 1953, p. 355-397) と筆者の安南訳語考釈（上）（国立台湾大学文史哲学報、第五期）が同時に発表された。*Gaspardone* 氏も筆者もお互に先方の寄贈して来た論文の抜刷を手にして奇しき偶然の一致に一驚したのであつた。其後間もなくして筆者は渡仏し、*Gaspardone* 氏と親しく安南訳語に就て語る機会を得たが、拙文の下

篇は筆者の留守中に、翌年（一九五四）年末安南訳語考釈（下）として文史哲学報第六期に掲載され、結局 Gaspardone 氏と筆者の間に存する異見に就て論及する暇がなかつた。其後巴黎在住の越南の著名な学者である黄春翰氏が安南訳語に関する氏と筆者の研究を綜合検討して、自家の主張もまぢえ新しい研究を發表される計画のあることを聞いたが今日に至るも実現されず、かくして、安南訳語の多くの語例にて Gaspardone 氏と筆者の説が喰違つたまま十余年を経過したのである。

按ずるに、Gaspardone 氏の研究は安南訳語諸種の伝本の内最も信拠性を欠く近藤本を使用し、河内本を参考したのに止まるが、筆者の研究は河内本・静嘉堂本・阿波国本・内藤本及び近藤本の五種の伝本を校合に使用している。其後・筆者はより充実した研究を志し、倫敦大学の School of Oriental and African Studies の図書館で倫敦本のマイクロフィルムを撮り、又玄覽堂本のリコピーをも入手したが、欧州から帰国后間もなく台湾を離れて越南の大学に転勤し、更に一九六二年からは香港の中文大学新亜学院で奉職することになり、久しくその念願を実現し得なかつたが、この度機会を得て倫敦本及び玄覽堂本を併せ校合し、又 Gaspardone 氏の研究をも参考することにより、全面的に安南訳語に関する筆者の研究を再検討し、内容に少からざる補充・訂正を加えることが出来た。

註。

- (1) 石田幹之助、南海に関する支那史料、頁二六五〜二二七参照。
- (2) J. Klaproth, Abhandlung ueber die Sprache und Schrift der Uiguren, 1822.      School of Oriental Studies, vol. VI, part 3, pp. 715-749, 1931.
- (3) W. Gruber, Die Sprache und Schrift der Jucen,      Ibid., A Chinese Vocabulary of Cham Words and Phrases, Ibid., vol. X, part 1, pp. 53-91, 1939.
- Leipzig, 1896.

- (5) 田坂興道、「回同館訳語」語釈、東洋学報、卷三十、頁九六  
 ～一三一、二三二～二九六、五三四～五六〇、昭和十八年。
- (6) 小倉進平、「朝鮮館訳語」語釈、東洋学報、卷廿八、頁三  
 六一～四二二、五一一～五七六、昭和十六年。
- (7) 伊波普猷、日本館訳語を紹介す、方言、卷二、第九号、頁  
 四一～六七、昭和七年。
- (8) 秋山謙蔵、明代に於ける支那人の日本語研究、国語と国文  
 学、第十卷、第一号、頁一～三八、昭和八年。
- (9) 山本達郎、華夷訳語に見えたる百夷及び八百の文字、東方  
 学報、東京、第六冊、昭和十一年。
- (10) E. Gaspardone, Le lexique annamite des Ming,  
 Journal Asiatique, Année 1953, pp. 355-397.
- (11) 陳荆和、安南訳語考釈(上)(下)、国立台湾大学文史哲学  
 報、第五・六期、民国四十二年～四十三年、頁一四九～二四  
 〇、一六一～二二七。
- (12) Denison Ross. New Light on the History of the  
 Chinese Oriental College and a 16th century Voca-  
 bulary of the Luchuan Language, T'oung-pao, Série  
 II, pp. 689-695, 1908.
- (13) P. Pelliot, Bibliographie, BEFFO, t. IX, 1909,  
 pp. 170-171; Ibid, Compte rendus, Journal Asiatique,  
 juil. -août, 1914, pp. 177-191.
- (14) H. Maspéro, Etudes sur la phonétique historique  
 de la langue annamite, BEFFO, t. XII, 1, pp. 7-9.
- (15) L. Arousseau, Bibliographie, BEFFO, t. XII, 9,  
 pp. 198-201.
- (16) 石田幹之助、女真語研究の新資料、桑原博士還暦記念東洋  
 史論叢、頁一二七～一三二八、昭和六年。
- (17) 神田喜一郎、明の四夷館に就て、史林、第十二卷、第四号、  
 頁一～一六。
- (18) 浅井惠倫、校本日本語、安藤教授還暦祝賀記念論文集、  
 頁三～五六、昭和十五年。
- (19) 陳育崧、椰陰読書記、南洋学報、第十卷、第一輯、頁五五  
 ～五八。
- (20) 許雲樵、華夷訳語伝本攷、南洋学報、第十卷、第二輯、頁  
 一一～一六。
- (21) 浅井惠倫、上引論文、頁五～六。
- (22) 小倉進平、上引論文、頁三六九。
- (23) H. Maspéro, loc. cit., p. 9.
- (24) L. Arousseau, loc. cit., pp. 198-201.
- (25) P. Pelliot, Compte rendus, Journal Asiatique,  
 1914, pp. 177-191.
- (26) H. Maspéro, loc. cit., p. 8.
- (27) 浅井惠倫、上引論文、頁四～五。
- (28) Cf. E. Gaspardone, loc. cit., p. 355, note 1.
- (29) 許雲樵・上引論文、頁一六。

- (30) Norman Wild, Materials for the study of the Ssu I Kuan (Bureau of Translators), Bulletin of the School of Oriental and African Studies (University of London), vol. XI, 1943-46, pp. 619, 620. Maurice Durand, *Compte rendus, Dan Viêt-Nam*, No.1, 1948, p. 53.
- (31) P. Pelliot, *Le Hoja et le Sayyid Houssin de l'Histoire des Ming. Appendice III, 2. Le Houei-t'ong kouan*, T'oung-pao, t. XXXVIII, 1948, p. 249, 251-252.
- (32) Ibid., loc. cit., 3. *Le Houa yi yi yu et autres vocabulaires polygrotes*, T'oung-pao, 1948, p. 277.
- (33) H. Maspéro. loc. cit., p. 9. Maspéro は一面近藤本の編者は火原潔である可能性があるとし、一面丙類訳語の編成年代は十五世紀末から十六世紀初頭となす、かくすると洪武十五年(一三八二)火氏の編した蒙古訳語と丙類訳語の間に一百年以上の間隔が生ずることになり、その説の成立し得ないことは明らかである。
- (34) E. D. Edwards & C. O. Blagden, *A Chinese Vocabulary of Malacca Words.....*, BSOS., vol VI. part 3.
- (35) L. Arousseau, loc. cit., p. 201.
- (36) 伊波普猷、上引論文、頁四六。
- (37) 石田幹之助、女真語研究の新資料、頁二二九〇。石田教授はこの事実にかんがみて、新たに丙類訳語の来源を検討すべきことを提議して居られる。按ずるに朱之蕃は茅伯符と同じく万曆中葉の進士であり、曾つて吏部侍郎に任じ、又朝鮮にも出使して外夷事情に精通することで名が聞えていた。茅氏所輯の訳語に「朱之蕃序」が附せられたのは後世の人が皇明象胥録の呉序をとり、これに朱氏の名義を附して、つけ加えたのであらう。
- (38) 慎懋賞の慎子研究に就ては現代の学者でこれを疑問視する者が居る。羅雨亭(根沢)は曾つてその論文「慎懋賞本慎子弁偽」(燕京学報、第六期、古史弁第四冊、下編頁六二五-六三七)にて梁啓超の言を引き、「吾師梁任公言、頭係慎懋賞偽造、為同姓人張目」と述べ、八項目に分けて慎懋賞所輯の慎子内外篇が偽造であることを論証してゐる。羅氏は別に「慎懋賞慎子伝疏証」(古史弁、第四冊下編、頁六三八-六四六)にても慎氏の慎子伝に就て多くの疑問を提出してゐる。
- (39) 王錫爵は明史(卷二一八)にその伝があり、嘉靖十三年(一五三四)に生れ、官位は吏部尚書に進み、万曆十二年(一五八四)王家屏と共に入閣、机務に預り、十九年(一五九一)に罷めている。書画の蒐集を以て世に聞え、万曆三十八年(一六一〇)に卒している。これとは別に、千頃堂書目(卷十五、類書類)には呉人慎懋官撰として華夷花木鳥獸珍玩考(十二卷)なる書名が挙げられている。この書の万曆刊本は現に国立北平図書館の架蔵する所であり(善本番号一六

○四)、同書の李時英序によると、慎懋官は吳興郡(即ち今の吳興、湖州とも称す)の人で汝学と号し、その父は山泉先生と号した、更に慎懋官の自序の年代は大明万曆九年(一五八一)九月となつてゐる。今慎懋賞と慎懋官を対比すると、原籍・家姓・排行・年代を同じうする、而も「慎」と云う姓は極めて稀である、かくみると、兩人は兄弟又は従兄弟であつたと思われる。

(40) E. Gaspardone, *loc. cit.*, pp. 358-359.

補註：各種華夷訳語の内、百夷館訳語と八百館訳語は泉井久之助教授によつて、緬甸館訳語は荻原弘明氏によつて最近解説が試みられてゐる。

泉井久之助、百夷館雑字並びに来文の解説、

「比較言語学研究」所収、創元社、一九四九年。

同　　パリ本・東洋文庫本華夷訳語、

八百館雑字ならびに来文の解説、

京都大学文学部研究紀要、第二、

頁　一〇九、昭和廿九年、

泉井教授は四訳館々則によつて、八百館が増設されたのは明正徳年間、殊にその六年(一五一二)のことであらうとなし、八百館訳語の編纂も大体その頃であらうと推考して居られる。

荻原弘明、東洋文庫本華夷訳語緬甸雑字についての覚書、

鹿大史学、第十三号。

同　　巴里本華夷訳語緬甸館訳語についての覚書、

安南訳語の研究(一)

鹿大教養学部史学科報告、第十四号。

尚、東京大学文学部三根谷徹教授はつとに「安南語の声調の体系について」(金田一博士古稀紀念言語民俗論叢、昭和廿八年、頁一〇一七—一〇四〇)や「韻鏡と越南漢字音」(言語研究、昭和四十年、第四十八号、頁一三—二二)等越南語関係の論文を発表して居られるが、拙文脱稿後、同氏に未刊行の安南訳語々々の研究があることを初めて知った。拙文にて三根谷氏の御研究を利用出来なかつたことは誠に遺憾であるが、将来参考の機会を得て、一層拙文の充実を期したいと思う。